# 通信 いわて地域総研

高田松原津波復興祈念公園

目　　次

●表紙写真　１Ｐ
●東日本大震災津波 10 年のつどい　シンポジウム「震災から 10 年の総括と地域の将来を語る」　２Ｐ～10Ｐ
シンポジスト　陸前高田市地域振興部長　阿部勝さん・（株）高田松原代表取締役社長　熊谷正文さん
陸前高田市社会福祉協議会事務局次長　安田留美さん（当日欠席）
ロッツ株式会社、心理相談員　宮本妃菜さん
コーディネーター　特定非営利活動法人岩手地域総合研究所理事長　井上博夫さん
●「戦争体験を掘り起こし　記録する活動に参加して」（第３回）　10Ｐ～11Ｐ
釜石・戦争を記録する会代表、宮古・下閉伊地域の戦争を記録する会　代表　前川慧一さん
●子育て・教育調査研究部会からの報告　「学校統廃合と地域づくり」　部会事務局　斉藤勲さん　11Ｐ～12Ｐ
●地名の話 25（いいおかたてふもとしゅうらく【飯岡館麓集落】）　高橋宏壽さん　12Ｐ

NPO 法人
岩手地域総合研究所

岩手県盛岡市中央通二丁目８番 21 号　Ｍホール
Tel･Fax:019-624-6715
メール:i-chiikisouken@salsa.ocn.ne.jp

# 東日本大震災津波１０年のつどい

## シンポジウム「震災から１０年の総括と地域の将来を語る」

４月25日（日）午後１時から陸前高田市民文化会館・奇跡の一本松ホールで東日本大震災津波救援・復興岩手県民会議・特定非営利活動法人岩手地域総合研究所共催による「東日本大震災津波10年のつどい」が開催されました。１５０名が参加しました。

東日本大震災津波救援・復興岩手県民会議代表の西崎滋さんのあいさつに続き、シンポジウム「震災から10年の総括と地域の将来を語る」が行われました。

**シンポジスト**

**阿部　勝さん　陸前高田市地域振興部長**

**熊谷正文さん　（株）高田松原代表取締役社長**

**安田留美さん　陸前高田市社会福祉協議会事務局次長（欠席）**

**宮本妃菜さん　ロッツ（株）心理相談員**

**コーディネーター**

**井上博夫　ＮＰＯ法人岩手地域総合研究所理事長・岩手大学名誉教授**

**コーディネーター**　今日のシンポジウムの趣旨ですが、「震災から10年の総括と地域の将来を語る」というのが今回のテーマです。

まず私から「これまで」と「これから」ということに関して陸前高田に限ってですが、簡単なデータをお示しして、これからのシンポジウム討論の足しになればと思っています。

復興計画の期間というのを国、各県、陸前高田市がどういうふうに設定してきたかということです。岩手県と陸前高田は少し早くて、２０１８年度までとなっていまして、それぞれ総合計画に切り替わってきています。国のほうの復興期間は共通設定が10年で、それが終わったところという段階です。ですから、これから先さらに新たなステップを踏んでいくということになっていきます。その間にどういうふうに復興事業が行われたかということですが、大きく分けてハードの復旧・整備と、ソフトの支援ということで分けてみると、従来の災害対応というのは公共施設の壊れたものを元通りに直すということが中心でした。元通りに直すというのは明治44年に「補助ニ関スル法律」というのができて、ここから本格的に災害復旧補助金というのが始まってきます。

明治三陸津波のときはどうだったかというと、じつは岩手県から国に対して、多くの学校施設が壊れたので何とか支援をお願いしたいという文章を出しているのですが、国からの回答文章は非常にそっけなくて、そういう前例はありませんと終わっていたのです。そういう意味からすると徐々に進んできたのですが、公共施設に限り、民間の施設については別だと。それから、復旧というのも元通りに直すという原型復旧ということで限られてきて、それが長い期間でした。それに対して今回の東日本大震災については、大きく言うと２つの違いが出てきたなというふうに思います。

ひとつは、公共施設の復旧というのも復旧に限らず、もう少し復興という観点を入れて直すことができるようになったということです。それから、グループ補助金というのは、民間の事業者に対しても、基本は元の事業の施設設備の復旧ということに限られているわけですが、こういう民間に対する補助というのも加わってきた。この辺が新しいところです。

ただソフトの支援という点については、それほど大きな進歩を見せなかったというふうに考えています。ひとつは、阪神淡路大震災を受けて作られた被災者生活再建支援金で、最高額の３００万円も今回は変わらなかった。ただ、ひとつだけ加わったものとして、被災者支援総合交付金というのが、２０１５年度を皮切りにして始まって、ここで個人の心の復興とか、コミュニティの再生ということにある程度自由に使えるようになったというところです。ここがまだ非常に不十分で、これからということを考えるときに、個人やコミュニティに対して何が必要なのかということを考えていかなければいけないなと思っているところです。

実際の人口と経済の変化を見ておきます。

陸前高田の場合は、震災前からずっと人口が減少してきていて、震災でカクンとなって、同じペースで減少が続いているということです。ただ、気をつける必要があるなと思うのは、陸前高田の場合の人口減少というのは、とくに震災以降に関しては、多くは自然減です。２０１１年度のときに大きく減って、そのあとも減少は続いてきています。

ただし、もうひとつの社会増減を見てみると、２０１１年に多くの方が転出されたのですが、その後の転出というのは、転入とほぼ同じ程度、あるいは時期によっては転入が超過するというふうになってきています。事業所の数は震災で大きく減りました。

それが持ち直してはいるのですが、震災前までは行っていない。従業者数もかなり持ち直してきてはいるのですが、震災前に比べればまだ少ないということで、これから地域経済をどういうふうに持っていくのかということがこれからの課題になってくると思います。

ただ、比較的明るく考えられるなと思いましたのは、事業所それぞれの経営状態を見たものです。震災のすぐあとの２０１２年に比べると、２０１６年のデータでは、ほぼどの分野も売上や付加価値額は伸びています。これをさらに継続させていけるかどうかが、まちの持続的発展にとって重要な段階にきていると思います。続きまして各報告者の報告に移らせていただきたいと思います。

## 震災復興事業にかかる地方自治体と自治体職員の役割

**阿部　勝さん**

### 国の制度を使いながらスピード感を持ちつつ、住民合意をどう取っていくか

私は平成18年から都市計画課で仕事をしていて、震災当時も都市計画課におりました。今の仕事は、商業や観光やスポーツや農林水産業に関わる部署なのですが、それまでは復興事業のハード整備を含めた現場にずっといました。ずっと震災後10年間走ってきて、特徴的な点を２つお話ししたいと思います。

国の復興事業というのは大変限られていますし、制度も非常に複雑で制限があります。これを決められた復興期間内に、この制度を

使ってどうまちづくりをするかというのは非常に難しい仕事だったなと思います。もちろん市役所だけじゃなくて、いろんな人たちが関わって計画を練ったり進めたりするわけですが、多くは外の人が結果的にやるものです。市役所は震災で1／4の職員が亡くなりましたし、本庁職員で言えば1／3が亡くなりました。

都市計画課で計画に関わる部門で生き残っていたのは私だけでしたので、復興計画の具体化を図る上で、そもそも地元の人間の感覚であるとか、震災前のまちの姿、風景、人間関係、お祭りなどの文化、そういうものをまず行政が作るプランとして整理をする必要があるというふうに思いました。そういう点では、1人ではありましたが、地元の人間がそこに関わるという意義はとても大きいものがあるなと思いました。この事業を進めるにあたって注意したのは、そうした国の制度を使いながらスピード感を持ちつつ、住民合意をどう取っていくか、住民のみなさんにどう理解していただいて納得していただくかというところに大変力を注ぎながら考えました。国の災害復旧事業であるとか、復興交付金事業が制度としてはもちろんあるのですが、それを実践するためには様々なハードルがあります。なので、何か受動的に復旧事業が進んだということは本当に一切なくて、それぞれの係、分野、いろんな国との折衝やら非常に苦労しながらやりました。

もうひとつは、そうやって作り上げた計画を、実際にそこで事業を展開していく商業者のみなさんが主体的に主人公となって関わっていくということをどう作っていくかということに意を用いました。

通常の商業の場合は、まちがあり、交通量があり、そういったところで商売が成り立つわけで、そういうところに立地をするわけです。

しかし、陸前高田の場合は、街中は大規模な造成工事を行っていましたし、そこに住民がどのぐらい住むか、商業者がどのぐらい帰るかというのが全くわからなかったわけです。そこに商業者のみなさんが、いろんなところで仮設店舗を営業しながら、儲けのための出店ではなくて、もう一度まちをつくるという観点で中心市街地への再建のためのご努力をされてきている。しかもご自身の住宅も建てる上で、様々なグループ補助金という制度もありますが、いずれ手出しの部分というのはかなり大きなものがあります。そういうリスクを背負って中心市街地に出店される方々の思いにどれだけ行政が寄り添えるのか。しかも限られた国の制度の中でそれをどう活用できるのか。

商業者のみなさんとよく対話をしました。

その中で中心市街地にある「まちなか広場」と、その向かいに建っている図書館、そこをまちの中心に配置をしようと。また、公園には子どもたちが遊べる大きな遊具を設置しようとか、そういうお金の工面もしながら商業者の声を実現するためにプランを作って実行してきました。今、市はノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくりを目指していて、ハードもソフトもやさしいまちづくりを行っていくことで中心市街地が整備をされています。

全体的に本市の場合は、まず人が住める安全なまちをということで造成工事も行ってまいりました。最近は住宅もぽつぽつですが建ってまいりました。中心市街地と、松原エリアに整備された復興祈念公園、運動公園、それから前の県立病院があった辺りを整備しているオーガニックランド、気仙川を超えて今泉にはCAMOCY(カモシー)というように、結果的に半径1㎞以内に大変魅力ある個性的なエリアが広がっているというようなまちになってまいりました。

私たちがこれまで積み上げてきたもの、ハードが中心でありましたが、それを使いながらいかに今後の持続的なまちづくりに生か

していくかということが課題になってまいります。

祈念公園には多くのみなさんがいらっしゃいますし、震災後当初を改めて思うと、いろんな団体、民間企業のみなさんとのやり取りもあり、たくさん絆ができました。名古屋市との連携協定でずっとつながりを持っていただいておりますし、海外ではシンガポールやアメリカのクレセントシティ。スポーツでは楽天。川崎フロンターレはずっと震災後から関わっていただいて、それがきっかけで川崎市との経済的なつながりができています。こうした震災でつながってきたいろんなつながりを生かしながら人とお金を回す、そういう取り組みがこれから大事になってくるんだろうなと感じています。

この中心市街地は、大変魅力的な特色のある建物もできてまいりました。高田駅の脇には、アムウェイ財団が寄付をして作っていただいた「まちの縁側」という、隈研吾先生が建築した大きな木造の複合型のコミュニティ施設がございます。いま博物館が建設中で、復興祈念公園を設計された内藤廣先生が設計した建物が整備されています。

あと、まちなか広場には、伊東豊雄先生という著名な建築家が設計した「ほんまるの家」があります。ひとつの場所でこうした複数の著名な建築家のみなさんの建物があるというのも大変珍しいそうで、建築に関心のある方にはたまらないという話を伺ったこともございます。

本来であれば、昨年、一昨年の祈念公園のオープンから多くの方がお越しになって経済も回り始めると期待していましたが、現在コロナでこのような状態になっていますが、何とかこれを乗り越えて次のステージへ前に向かっていきたいと思っております。

中心市街地でのホテルの建設なども進んでおります。オーガニックランドもホテルもそうですが、本市に関わっていただく事業者は、儲けるためだったらわざわざ陸前高田には来ないです。なので、中心市街地の整備は順調に進んでおります。また、２０２３年（令和５年）には、復興祈念公園を会場に全国植樹祭が開催されます。

今年の夏には、いよいよ高田松原の海開きをやる予定です。県のみなさんが、砂浜を作る事業、松を植える事業もやっていただいて、以前のような海水浴もできるようになってまいりましたので、いろんなイベントがこれから開催されます。土地の利活用についても、土地が余っているという非常にネガティブな面はありますが、非常に日当たりの良い、良好な宅地が整備をされていて、伸びしろがあるものだなというふうに思っております。市役所としても市民のみなさんと力を合わせながら引き続き頑張ってまいりたいと思います。

## 地域振興における道の駅の役割

**熊谷　正文さん**

私は２０１９年３月まで市の職員として復興事業に関わってまいりました。その年の４月から株式会社高田松原の代表取締役に就任し、現在に至っているところでございます。

株式会社高田松原は市の施設でございます「道の駅高田松原」の指定管理団体として建物の管理、運営をしているところでございます。道の駅高田松原は、高田松原津波復興祈念公園の中にございまして、２０１９年９月にオープン致しました。その後、順調に来場者が増えてきてこれはいいなと思ったところでございますが、昨年の４月はコロナ渦で、去年の今頃は休業という状況にもなりました。２０１９年度は６か月間で約40万人のお客さんに来ていただきましたが、昨年度は１年間で約40万人ということで、半分という状況でございます。今年度に入りましたら、４月もかなり厳しい状態でございます。

## 道の駅に求められるもの

道の駅の目的は、道路利用者への安全で快適な道路交通環境の提供。地域の振興や安全の確保に寄与するということになっています。機能としては３つの機能がございます。１つ目が、休憩機能。これは24時間、無料で利用できる駐車場やトイレがある。２つ目が、情報発信機能として、道路情報、観光情報、その他の情報などを提供する。

３つ目が、地域連携機能ということで、うちの場合は観光リクリエーション施設が大きな目玉になっています。これらの３つの機能が重なり合いまして、地域とともにつくる個性豊かなにぎわいの場というのが道の駅というふうに提言されています。

仙台から八戸までつながる三陸沿岸道路が震災を契機に急速に整備されました。現在は、仙台から田野畑までつながっています。田野畑から久慈が今年中に開通すると聞いております。そうしますと、三陸道沿いに道の駅を充実させてきているということで、宮城県登米市に三滝堂という、本当にインターのすぐそばにできた道の駅が大変賑わっております。先月の３月には気仙沼の大谷海岸という道の駅がリニューアルオープン致しました。そして、２０２２年度の予定と聞いておりますが、新たに道の駅山田が山田インターのそばにできるということです。４月には道の駅田野畑もリニューアルオープンしているということで、この道路を活用した振興策を図っていくという道の駅が広がっております。

## 道の駅高田松原の現状

２０１９年９月にオープンし、その次の10月、11月はものすごいお客様に来ていただき大変な思いで過ごしました。このあともそれなりにお客様に来ていただき、３月は震災の関係もございまして多くの方に来ていただきましたが、４月からはこのように本当に激減という状況でございます。

道の駅高田松原の取り組みですが、まず産直コーナーということで農林水産物。当道の駅でも農産物、広田湾で取れる水産物を取り扱っておりますし、おみやげ品として物販も販売しております。そして３つの店舗で地元の食材を使った飲食も提供しているところでございます。この３つは、どの道の駅でも定番かなと思っておりますが、当道の駅の違うところは、隣の東日本大震災津波伝承館というところでいろんな教訓などを学んでいただいています。その方々に防災とは何ぞやと学んでいただいた上で、常に備えるということで防災グッズをご紹介したいなということで販売しております。

また、この追悼祈念施設には献花する場所もございますので、そちらに使っていただく生花も２月から販売を始めたところですし、観光を新たなビジネスという形で進めてまいりたいというふうに考えております。

## 交流人口の拡大と課題

昨年の９月～10月に隣の東日本大震災津波伝承館で来場者の方々の調査を行っております。その結果、２／３が県外の方でございました。このように多くの方々が交流人口という面ではかなり貢献していただいているかなと思うのですが、県内の方では３／４が日帰りです。県外でも１／４が日帰り。なかなか宿泊にまでつながっていないというのが現状かなと思っております。

現在の課題としましては、当市は通過型で滞在時間が短いなというふうに痛感しているところでございます。

もうひとつは、できたばかりですので多くの方々に来ていただいていますが、飽きられないようにリピーターを確保していかなきゃならないというのが課題と感じているところでございます。

**地域の産業振興に向けて**

まず産直部門から見た課題では、産業の担い手の確保ということでございます。

当道の駅の売上を見ますと、農林水産物、農はリンゴです。水はホタテ等々です。これらを地域で作ってもらわないと販売できないわけですから、それを充実させていきたいなと考えていますが、この産直組合の方々の構図を見ると高齢の方々が多い。やっているだけで十分、拡大しようとは思わないという方が多いです。その中で担い手をどういうふうに確保しながら振興していくかというのが、産業としても、当道の駅としても大きな課題ではないかと考えております。

２つ目は、物販部門という意味では、おみやげ品は確かに売れておりますが、それを占める地元の企業の割合が非常に少ない。

地元の企業による商品化というのを一緒に取り組んでいかなければならないなと思っているところでございます。

最後は、特色を出していかなければならないということで、次から次へと新しい商品を売り出していかなければならないなと思っているところでございます。

## 被災者の生活支援活動について

**安田　留美さん**

陸前高田市社会福祉協議会の安田さんからお話をいただく予定だったのですが、急きょ出られなくなったという連絡がありました。報告資料はいただいていたので、報告資料のスライドだけ紹介をしたいと思います。

私は今年70歳になりまして、災害公営住宅に住んでいるので時々見回りに来ていただいて、そういう仕事も社会福祉協議会の仕事としておやりになっているそうです。

陸前高田市の被災状況の紹介がありまして、岩手県の市町村の中で１番大きな被害があったわけです。それに対してたくさんの被災者に寄り添い、支援する仕組みの必要性ということを認識されて活動されているということです。

社協での支援活動は、仮設や災害公営住宅への巡回訪問。それから、相談支援や情報提供、連携をするためのケース検討会議とか、集う場、交流イベント、コミュニティづくりの支援、社会的な助け合いの仕組みづくりのための事業、そういうことをやってこられたということです。被災者支援の中で生活支援相談員というのがあります。生活支援相談員の配置人数が平成24年３月～今年３月までになりますが、半分弱にまで減ってきているという現状がありまして、その結果、対象世帯数は減っている。これまでの成果として、「待つ相談」ではなく「出向く相談」をやってきているということです。これからの課題としては、「複合的な生活課題を解決する仕組みづくり」というのが必要で、個々の被災者に対する支援からコミュニティとしての地域に対する支援というのが求められてきているというお話です。以上がご報告の予定だったのですが非常に残念です。

## このまちに“居る”ということ

**宮本　妃菜さん**

**初めての陸前高田**

私が陸前高田に初めて来てから５年間は通っていて、そこから念願の移住という形だったので、私と陸前高田の関係から、「する」と「居る」ということについてお話をして、それを踏まえて今後のことにつなげていければと思っております。

簡単に自己紹介をさせていただきます。先ほどご紹介ありましたように兵庫県宝塚市の出身です。阪神淡路のときは２歳になる直前でした。実家も全壊しておりまして、父と母からいろいろ話を聞きながら育ってきま

した。高校まで地元におりまして、２０１１年３月、ちょうど入試で関西から関東に出てきたときに震災があり、関東で揺れを体験しました。当時は化学を勉強したくて関東に出てきたのですが、そのあと２０１３年に初めて陸前高田に来てから、いろんな出会いとか、いろんな経験がありまして、もっと子どもの理解をしたいということで勉強し直そうと臨床心理学のほうに編入をいたしました。そのあと大学院まで進学しまして、卒業と同時にこちらに移り住んできたという形です。

## 移住、そして見直し―「居る」意味の再発見

移住してからはロッツ株式会社という会社に入社いたしました。健康ということをテーマに震災後に支援から立ち上がった会社です。健康に関することであればいろんなことにチャレンジしております。今年移住して３年目になりますが、昨年度末に陸前高田で出会った方と結婚いたしまして、本籍地まで岩手の者となりました。２０１３年に来てから語り部の皆様にいろんなお話を聞かせていただきました。当時のことをお話で伝えていただいても、ガレキがすっかり片付いてしまったまちを見て想像しかできない、わかりきれないというのもすごく感じました。その無力感から、いま私は何もする力はないけれども、今日この日から2回、３回と来ていれば1年で思い出話ができる仲になれるんじゃないかなというのが通おうと思った最初です。その時は過去の話を聞いても想像しかできないけれども、これから先は「あの時こうだったね」と一緒にしゃべれたらいいなと思って「居よう」というふうに思いました。そんなふうに過ごしているうちに、子どもたちとの関係は私にとって宝物でして、もっと子どものことを理解したいと思うようになりました。それで子どもの臨床心理学を学べる大学に編入学をしたのですが、今思えば自分の無力感に耐えられなくなったとも言えるなというふうに思います。いろんな出会いの中から盆踊りのお手伝いをさせていただいたり、自ら「たかたもりあそび」というイベントを開催するようになりました。地域の魅力、皆様と自然に付き合ってきたこと、お祭りとか、文化に触れましたし、子どもがのびのびと過ごせるすてきな自然に心を打たれ、その中でいろんな活動をさせていただいたことにとても感謝しています。そして、念願の移住をしました。

## “居る”の価値、難しさ

ずっと住みたかった陸前高田です。都会の暮らしではない各地区の集会とか、お祭り、お仕事もそうです。やりたいことがたくさんありすぎて、ちょっと頑張りすぎてしまった時期がありました。もっともっとするということを追い求めすぎて少し疲れてしまいました。そして、なかなか「する」ということが苦しくなってきたときに、このコロナでいろいろイベントが中止になったということもあるのですが、見直す時間ができました。本当は何がしたくて陸前高田に来たんだろうかということをずっと考えていました。その中で気づいたのは、「したいのではなくて、私は陸前高田に“居たかった”んだ」ということに改めて気づきました。「居る」ということはすごく難しいなというふうにも感じました。陸前高田だからこそ、日々生きていることの有難さ、ここにまず生きて存在していることの重みというのを皆様がお持ちでいらっしゃる、だからこそ私に「居る」という価値を教えてくれたんじゃないかなと思っています。震災を機に私のように生き方という

か、自分の身の置き場所、居場所というのが日本中で見直されたと思います。いま移住ブームと言いますか、自分がどこで暮らしてどう生きていくのか考えている私たちの世代の若者がたくさんいるようです。そういうときに、この陸前高田は「居る」ということを受け入れてくださる場所だなと思っています。こういうふうに受け入れてくださっている皆様への感謝と、自分が自分の居場所を大事にすること、そして私がまた誰かの居場所になれるように、これから頑張っていきたいなと思っています。

**コーディネーター**

これからということについて繰り返しがあるかもしれませんが、３人の方にお話をいただければと思います。

**阿部さん**

ハード面については、ピーカンナッツ系の施設を整備することになっていて、そういう事業が展開されます。民間では、オーガニックランドを含めて民間主体の事業を展開していくところです。本市は１００人ぐらい生まれて２００人ぐらい亡くなられる、自然増減ではそういう状態になりますが、宮本さんを含めて社会増減で言うと、大変多くの方々が高田に移住していてびっくりするぐらいです。Ｉターン、Ｕターンを含めて若い方々が移住されています。例えばＮＰＯとか、そういう団体だけではなくて、農業・水産業を含めて、震災前にはなかったような分野で若い方々が活躍している。

小さくても特色のある、やりがいのある仕事を興す企業を重視していきたいと考えています。また土地の利活用についてもいろんなことを考えていて、本市の利活用問題というのは自治体だけではなくて、国としても課題であるとして様々な支援もいただいておりますので、いろんな縦横の人間関係、これまでのつながりを要しながら、そういう課題にも向かっていきたいと思っています。課題は様々ありますが、地域同士のつながり、地域と行政の信頼関係に基づく共同が今後の課題に向けて大事な力になると思っておりますので、しっかりそういう意識で頑張っていきたいと考えています。

**熊谷さん**

先ほどの話とだぶるところもございますが、３つあると思っています。１つ目は、道の駅高田松原を作るときから、高田松原を含めた高田松原津波復興祈念公園というのは三陸沿岸のゲートウェイという位置づけにしたい。まずここを拠点にしてもらいたいなと思っていまして、三陸沿岸道路が全線開通となると行動範囲がかなり広がってくるかと思いますので、東北道の駅連絡会というのもございますし、そういうものを含めて連携を強くしていきたいなと思っております。

２つ目は、道の駅に多くの人が来ていると言われるのですが、その方々に市内のほかのところへも回ってもらいたい。とくに中心市街地で何かお買い物なり、食事なり、少しでも回れるような仕組みを一緒になってやっていかなければならないと思います。

最後は、この陸前高田市の観光で、今まではどうぞ見に来てくださいという形でしたが、ビジネスにしていかなくちゃならないと思っています。

**宮本さん**

これからについては、Ａ型・放課後デイサービスを５月に開所して頑張っていきたいところなのですが、Ａ型に来られる障害のある方は、環境さえ整えば、サポートさえあれば働ける方がたくさんいらっしゃいます。そういう方が担い手不足、人手不足のところで活躍する将来も本当にあると思います。

地元産業の中にこういう方々が働けるようなサポートをしていきたいなと思ってい

ます。

また、「たかたもりあそび」という個人でやっている活動のほうは、自分の足で、子どもたちが選んでいける遊び場というのを少しずつ増やして、危険を感じる目を養えたらというふうに思っています。総じて感じるのは、その人、個人の何かで狭まるのではなくて、その人が選べて、それが自然な生活の中で達成できるという、自然さ、日々の生活というのが大事だなと感じて、そこに取り組みたいなと思っております。

**まとめ…コーディネーター**

今日のシンポジウムで感じた点を話させていただくと、確かに非常に大きな被害を受けたまちです。多くの方がお亡くなりにもなったし、いろんな建物、住宅も含めて流されました。ようやく10年経って施設面ではかなりの復旧・復興を遂げてきたと思います。これからというときをいま迎えているのだと思います。

東日本大震災を契機にいろんな方が陸前高田に訪れてこられるようになりました。移住者も多く見られます。それも比較的若い移住者がたくさんおいでになっていて、そのことがまちに対して多様性を与えてくれているのではないかなというふうに思います。阿部さんに言ってもらいましたが、やりがいのある仕事というのが小さくてもいいからたくさんできるまち、それがいろんな条件の人たちがこのまちで暮らし続けることができるという環境になるのではないかなと。そのひとつを宮本さんも取り組んでいこうとされているのかなと思います。そういう多様性と、小さくてもいろんな仕事というようなことでまちづくりが進んでいくと、これから日本のいろんな地域の将来にとっても模範になり得る可能性を秘めているのではないかなと感じました。

まだまだこれからいろいろと取り組んでいかなければいけないと思いますが、ぜひ陸前高田の人たち、岩手のいろんな人たち、全国の人たち、そういうまちづくりの方向で進んでいければいいなというふうに感じた今日のシンポジウムでした。（文責　事務局）

## 戦争体験を掘り起こし記録する活動に参加して（第3回）

釜石・戦争を記録する会代表、宮古・下閉伊地域の戦争を記録する会

代表　前川　慧一さん

**体験集「戦争の時代を生きて」（発行：宮古・下閉伊地域の戦争を記録する会）に寄せられた主な内容**

**第3集（第1集、第2集→2021・3・15通信「岩手地域総研第64号に掲載」）。※寄稿・証言者　16人。**

●原爆投下直後の広島で、死体収容に従事し被爆した元兵士の「水くれー」の叫びにこたえられなかった無念さ。

●姉の安否確認のため長崎入りし、被爆した母から生まれた胎内被曝者としての72年の心の葛藤、いまだ未認定となっている被爆者の早期救済の訴え。

●兄2人が、妻子残し、ミンダナオ島、沖縄で相次ぎ戦死したが、村内に多くの戦死者が出ていることもあり、国のための戦死が名誉とされていた時代、悲しみを外に出せず、こらえ生きてきたくやしさ。

●中国の長江の南、水鳥の越冬地・ポーヤン湖に調査に入った環境保護学者が耳にした女性、子どもさえも片っ端から殺す日本軍兵士（東洋鬼（トンヤングイ））の暴虐のかぎり。

●「反日分子」を白状させるために、母親から赤ん坊を取り上げ、上高く放り投げ、落ちてくる赤ん坊を銃剣で突き刺し殺す鬼と化した日本兵。（フィリピン元女性教師の目撃談）

●短歌「先生の勧めに心躍らせて兄海軍に志願するという」

●「志願などせずとも「徴兵」くるべしと　兄

の背打ちて母は泣きたり」・・・に参加者らは涙を流し聞き入りました。

※各集の発表・懇談会は最後に「戦争のことを知らなければ、本当の平和は語れない！あらためて戦争の惨禍、体験を書きとめ、語り継ぎましょう。憲法9条守ろう」と申し合わせました。

**第4集**

●赤ん坊のころ、出征・戦死した父・・・父の顔も知らず、未亡人となった母と懸命に生きぬいてきた戦後。

●一人息子を戦争に取られ、戦死させられた親の悲しみ、それを嘆くことさえはばかられた時代。

●降り続く雨の中、兵士たちの下半身は泥にまみれ、尻から太ももは真っ赤にただれ、ハエや蚊におそわれ次々に倒れていった（地獄の行軍）

●戦って死んだ兵士よりも、マラリアと飢えで死んだ兵士がほとんど。その遺体は、兵舎の裏側に投げ捨てるように置かれ、山のように積みあがった。

●日本の植民地時代　だまされ、強制的に日本に連れてこられ、炭坑やトンネル工事で無給で、奴隷労働を強いられた韓国人父の怒り。・・・など13人

子育て・教育調査研究部会からの報告

## 学校統廃合と地域づくり

一緒に勉強しませんか　～会員募集中～

部会事務局　齊藤 勲さん

研究所が調査研究活動の推進のために４つの研究部会を設置したのは２０１９年３月でした。その方針に基づいて保育・教育関係の会員を中心に設置されたのが「子育て・教育調査研究部会」です。新妻二男常任理事を座長に２か月に１回のペースで、今まで13回にわたって研究会を開催してきました。その中で会員相互の保育や教育に対する思いの交流を通じて現在の保育や教育の抱えている問題についての認識を共有してきました。

具体的には、いわて県民計画の教育関係計画についての意見交換、第５回わたし＊まちフォーラム第４分科会の運営、高校再編計画についての検討、小中学校の統廃合の推移の学習などです。その中でいま県内で大きな話題となっている高校再編や小中学校の統廃合問題について調査研究してみようということになり、研究所の公募型研究に応募して２０２０年度から取り組んでいます。昨年度はコロナ感染予防のために現地調査はできませんでしたが、現地から先生や議員を招いて報告会を開催する形で現況把握に努めているところです。

学校の廃止は、廃止される学校に通っている子供たちにとっては通学時間が長くなる、放課後の行事が制約されるなど教育環境が激変し一大事件です。子どもたちが少なくなって学校を維持することが困難になってしまう状況があることも確かですが、たとえどんなに子どもたちが少なくなっても、その地域に子どもたちがいる限り、教育条件を整えるのが教育行政の役割であることも確かなのです。

私がこの部会に参加して思うことは、当該地域でたとえ少人数でも学校を残してほしいという要望がある限りは、それに応えて学校を存続させ、教育条件を整えるというのが行政の役割だということです。学校はその地域にとって住民のつながりのかなめの役割も果たしており、学校が廃止されることによって地域の衰退が加速してしまいます。地域づくりにとっても重要なテーマです。

少人数学校を廃止して規模の大きな学校に統合するという理由に、少人数では学力が向上しない、多人数の中で切磋琢磨しないと鍛えられないということがあげられています。

しかし本当にそうなのでしょうか。複式学級を取り入れざるをえない小規模校の子どもたちの方がむしろ学力は高いという調査結果もあるのです。少人数の方が生徒一人ひとりに先生の目が行き届くのではないでしょうか。

少人数だと希望するクラブ活動ができないなど不利な点があることも確かでしょうが、少人数だからダメという決めつけは間違いだと思います。現に小規模校でも、子どもたちのために創意工夫をこらして小規模校ならではの教育実践で先生方は奮闘しているのです。

学校の統廃合については、子どもたちや先生方、保護者や地域住民も含めて、ひろく情報を共有し、学校の在り方について考え、合意の上で決めていくということが重要だと思います。しかし、今回調査した紫波町における小学校統合の経緯をみると、子どもたちの教育環境をより良くというよりも、国から示された公共施設の整理縮小の方針に従い、財政的事情を優先し、住民の合意を無視して短期間に統合を進めたと言わざるを得ません。今後も継続して紫波町の動向を調査していきたいと思っています。

現在部会に参加しているのはOBの先生方が多いのですが、地域づくりとも密接に関係していますので、教育に関心のある方はもちろん、まちづくりという観点からも興味のある方の参加をよろしくお願いします。次回は6月に予定しています。参加希望の方は事務局の齊藤（自宅：019-647-2160）まで連絡ください。

## 地名の話―25

高橋宏（ひろ）壽（とし）さん

### いいおかたてふもとしゅうらく【飯岡館麓集落】盛岡市上飯岡

16世紀の飯岡館のふもとにどんな村があったかはわからないが，藩政期の集落については『内史略』に地名がのっている。

堤（ツツミ枝村6），十日市場（トウカイチバ6），在家（ザイケ1），大柳（4），外堀（トボリ（2），出張（デハリ3），三角（ミスミ5），柄目（カラメ1），館ノ前（7），寺舘（6），藤島（9）

数字は軒数

11村名で50軒です。現在残っているのは，堤・十日市・在家・大柳・館野前・柄目・藤島の7地名です。かつてあった「寺舘」は消えていますが，この地域でもっとも多い名字で，次いで堀間，田中，内館と続きます。

これらも地名であったと想定し地図に書きいれました。寺舘は長善寺を本拠地にした館屋敷で，山城の飯岡館にたいしふもとの日常生活の居館であったとおもわれます。外堀もありました。舘ノ前は寺舘の前。柄目は搦め手で，寺舘の裏口。

内館は飯岡館と寺舘の間のところでしょうか。堀間（際マ）は堀のそばでしょうか。在家は地頭の郎従で飯岡館の防備と農業に従事した農家・百姓。十日市場は地頭飯岡氏が流通を確保し村々を賑わせるために設けた商業施設。麓集落は路地が複数に通り，神社・寺院をもつもっとも大型の集落でした。